

浄土を求めさせたもの — 『大無量寿経』を読む—

第 115 回 (2018.10.1) の要旨

拝読文(『真宗聖典』61～62 頁)

瞋怒に迷没して財色を貪狼す。これに坐して道を得ず。当に悪趣の苦に更るべし。生死窮まり已むことなし。哀れなるかな。甚だ傷むべし。ある時は室家・父子・兄弟・夫婦、一は死し一は生ず。かわるがわる相哀愍す。恩愛思慕して憂念結縛す。心意痛着して迭いに相顧恋す。日を窮め歳を卒えて解け已むことあることなし。道徳を教語するに心開明ならず。恩好を思想して情欲を離れず。昏矇閉塞して愚惑に覆われたり。深く思い熟ら計らい、心自ら端正にして専精に道を行じて世事を決断すること能わず。すなわち旋り、竟りに至る。年寿終わり尽きぬれば道を得ること能わず。奈何とすべきことなし。給猥憤擾してみな愛欲を貪る。道に惑える者は衆く、これを悟る者は寡し。世間恩恵として憐頼すべきことなし。尊卑・上下・貧富・貴賤、勤苦恩務しておのおの殺毒を懐く。悪気窃冥してために妄りに事を興す。天地に違逆して人の心に従わず。

「瞋怒に迷没して財色を貪狼す」と言われています。毎日、マスコミに登場されている方々の中にも、このような表情の方はいらっしゃいますね。

そして「これに坐して道を得ず」と。これに坐してというのは、そういう在り方によってということです。「瞋怒に迷没して財色を貪狼」することに「坐」しているので、「道」を得ないのだと。ここでいう「道」とは生き様と言いますか、生きる在り方だと思います。仏陀が開かれた精神界を中国人に教えるのに、菩提 (bodhi) では意味が分からない。それを道という言葉で翻訳しているのです。

道はみんなが歩くから道となります。そのようなことが精神的な面にも取り入れられているわけです。地球上に道があるという意味だけではなくて、自分が正しく生きていると言うことを確認させるような方向性。それをこの道という字で表しています。そのような道から外れているのが、人間生活の在り方なのでしょう。

そして「当に悪趣の苦に更るべし」と。地獄・餓鬼・畜生という在り方が悪趣です。「更」は「かえる」という意味を持ちます。悪趣の苦に更るとは、せつかく人間に生まれたのに、瞋りと愛でお互いの命を傷つけ合って行く。そういうことが、次の命には悪趣に返ってしまうと。こういうことですね。

そして「生死窮まり已むことなし」と。生まれて死ぬということは窮まりがない。終わることがないのだと。そういう形で今の命の在り方を反省させる教えになったわけですね。流転と言いますが、現実の我々の在り方はある意味で流され転がされて生きていることを教えているのです。

「哀れなるかな。甚だ傷むべし」、そういう状況を自覚できないことが、哀れであると。傷という字を「いたむ」と読んでいますね。単に肉体の傷というだけではない。精神が傷つくのです。

「ある時は室家・父子・兄弟・夫婦」、こういう親しい人間関係として生きて来たはずなのに、「一は死し一は生ず」と。一方は亡くなっていく、一方は生まれてくる。こういうことが、次々に起こる。だから「かわるがわる相哀愍す」なのです。「更」を「かわるがわる」と読みます。更相哀愍とはお互いに哀れみあい痛みあうことですね。

そして「恩愛思慕して憂念結縛す」と。恩ということは扱いにくい文字、あるいは概念になっております。儒教の浸透していた中国、あるいは朝鮮、日本に非常に強くこの恩ということが、大事な言葉として理解されてきた。

明治が終わって大正、昭和と来るにつれて段々非常に厳しい天皇制国家というような形で、枠をはめて日本人の考え方をがんじがらめにしていき、そして最終的には、日本中心主義ということが、世界から批判される形で敗戦を迎えたわけですね。

そのような状況で、強く国民を教育したり、縛りつけたりする概念として恩が利用されてきた。要するに四恩（国の恩、国王の恩、父母の恩、師長の恩）と言いますが、恩という形で人間の発想を縛ってしまった。大事な概念なのですけれども、そういう不幸な歴史があったものですから、この言葉を使うことが難しい。

動物と違い、人間は長い期間を育てられて、やっと一人前になる。そのようにしてくれた親や、その他育ててくれた人々に対する「ありがとう」を示す感情として恩の字があてられてきました。

そして更に今勉強しています親鸞という人の浄土真宗は、他力ですから我々が生きているのではない、生かされているのだと。生かされているというのは、単に食物が与えられるとか人間に世話になっているとかという関係だけではありません。生きる道についての方向性を教えてもらう。だから、言葉を通して考え方を導いてもらう。更に仏陀が生涯の中で教えてくださった言葉や概念、論理などが、次に生きて行くものにとってやはり考え方なり、生き様なりを伝えていく。つまり教えとして聞くということが伝承されていきます。

そして更に親鸞聖人になると、本願の教えとなります。この『無量寿経』は本願の教えです。如来が衆生を救いたいと願ってくださったのだと。その願いが教えとなって我々に向けられている。そのかけられてある願いである本願のはたらきで我々は心が翻る。心が翻るのは、本願がはたらいてきたことが我々の心を翻す力になる。そして本願のはたらきが教えの言葉となって我々に領きを与えてくれる。そういうことに対して、親鸞聖人は深く恩徳ということを抑るわけです。これは、だから具体的な国王とか、親とか、人間関係というそういうものよりも、我々一人ひとりがこの苦悩の命を破って明るみを感じて生きて行けるようになる。そういう道筋については本願のご恩、あるいは本願力を教えてくださる仏陀のご恩、そういうところに恩徳ということが、強く言われるわけです。

我々は親鸞の教えに従ってそれを生活の基礎にしています。だから「如来大悲の恩徳は身を粉にしても報ずべし、師主知識の恩徳も骨を砕きても謝すべし」と言われます。自分の身を捧げても恩に報いることはできないのだと。そういう大きな恩をいただいたのだと。そういうことが、親鸞聖人ご自身が和讃の、いわゆる報恩講和讃と言われる恩徳讃で詠っておられます。その恩徳を我々はいただくことを信心の感情として大切なことだとして伝えてきたわけです。

確かに近代国家の歴史によって、恩ということは大変使用しにくくなりました。けれども、この恩という言葉は本当は我々のいただいて出遇う仏法にとっては大事な概念なのです。本来は縛る概念ではありません。かえって、本当の自由を与える概念なのです。自らが仏法に身を捧げていくという意味で恩徳を使いたいのです。

しかしそこに義務感のようなものが生ずると愛着になるわけですね。「恩愛思慕」とありますが、自分の愛した相手に恩愛思慕する。そうすると、それが失われて行った場合には、今度は悲しむ。「憂念結縛」する。憂いの念が結び縛る。恩愛思慕という強い情念が起こるのだけれど、実は憂念、憂いの念だと。こういうものが縛ってくるのだと。

「心意痛着して迭いに相顧恋す」、この心と意では意味も少し違います。心は内面的な面が強いです。意は、意思と言うように、表に出てくる意識作用です。唯識思想では心と意では文字

の意味が大きく違いますが、今はその思想が入ってくる前ですからデリケートな違いは言わないのです。痛と着という字を使って心にも意にも痛みや執着がある。そして「迭いに相顧恋す」。恋とは単に男女関係だけではなく、色々使われますよね。この場合も、「室家・父子・兄弟・夫婦」ですから、人間関係の中で、お互いに慕いあったり、愛し合ったりするということを表わすわけです。

「日を窮め歳を卒えて解け已むことあることなし」。そういう縛り付けられた人間関係があって終わることがないというわけです。毎日毎日、そして毎年毎年、そういうことが繰り返されていくと。

「**道徳を教語するに**」、この道徳は単なるモラルとか倫理ではない。仏道の教えを道として教える。それを道徳と言っています。教えの言葉で語ろうとしても「心開明ならず」。心が開かれたり明るくなったりしないというのです。

「**恩好を思想して情欲を離れず**」と。好は人間にとって状況が好くなるような方向性を表わす文字だろうと思うのです。だから、恩好を思想するということは、先ほど言ったような、人間関係として良い意味で恩を考えて行こうと。こういうことを考えるのだけれど、「情欲を離れず」と。情欲、これが人間関係について回る問題だと思うのです。恩好というのは、人間の理性的な営みと言えるかと思いますが、けれども実は情欲を離れずに、貪りやら、欲望で動かされてしまう。それが人間なのですね。

「**昏矇閉塞して愚惑に覆われたり**」。昏も矇も暗いという字ですね。どちらも闇ということを表わしています。閉も塞も閉ざすという漢字です。これは精神的な在り方が自己中心的になり、精神を闇にしてしまう。こういう在り方を語っているのです。

「**愚惑に覆われたり**」、愚の根本を仏教では無明と押さえます。本当の自己が見えていないことを言います。無明のはたらきは、結局、自我愛を起こしてくることで。惑いという字も煩惱です。「愚惑に覆われたり」とは。心とか意識は煩惱に覆われた状態で起こるのです。人間は理性があると言うけれど、その理性が動き出す根にこのやっかいな構造があるわけです。

「**深く思い熟ら計らい、心自ら端正にして専精に道を行じて世事を決断すること能わず**」。

ここだけ文章が長くなるのですけれど、「心自ら端正にして」とは、自分自身の心を自分で正しく保とうということ。そして「専精に道を行」ずる。専精とはそこに集中していくような方向性です。一つの仕事なら仕事に集中して関わるような方向性を専精というわけです。

そして「**世事を決断する**」。世事を決断するということは、この世の事柄を決断すると。

しかし人間に野心があったり、欲があったりすると、世事を決断するということは難しくなります。

だから「**心自端正 専精行道決断世事**」ということ、非常にまっすぐで努力して生活し、そしてハッキリともものを見ることが出来ている在り方。それに対してそれは不能であるとして全部を否定するわけです。

そして「**すなわち旋り、竟りに至る**」と。この旋という字は、流転するという意味でもありますが、グルグル回るだけで終わってしまうと。

「**年寿終わり尽きぬれば道を得ること能わず**」と。こういうわけで、グルグル回るだけですから、歳だけは取るけれど、道を得ることはできない。

「**奈何とすべきことなし**」と。どうして良いか分からないのだと。こう言って、その次は大変難しい漢字が出てきています。

「**総猥憤擾してみな愛欲を貪る**」。淫らも憤という字も乱れるという意味のようです。

擾という字も乱すという文字のようです。ですから、猥も憤も擾も乱れるという字が繰

り返されていて、全てとにかく支離滅裂であり、皆愛欲を貪ると。

そして「道に惑える者は衆く、これを悟る者は寡し」と。道に惑うて歳を終えていくのですね。現代は確かに長生きはするようになりました。しかし寿命を無理矢理医学で延ばしているわけです。最期はいわゆる認知症になる方が非常に多い。病気ではなく自然現象なのですが、薬で生かすだけのことだから、長く生きてしまう。とにかく長生きするために長生きする。その挙げ句の果てに認知症というわけですからね。まあ、そういう命になるということは、現代文明の結末なのだなと思いますね。

「世間恩恩として憍頼すべきことなし」。世人が生きている間柄を世間と言います。恩は忙しいという字と同じような意味を持っています。恩恩という字は、忙しい、慌ただしいということを重ねているのです。憍頼すべきことなしとは明らかに頼れるものがないという意味のようですね。

そして「尊卑・上下・貧富・貴賤、勤苦恩務しておのこの殺毒を懐く」と言われます。「尊卑・上下・貧富・貴賤」とありますが、現代のみではなく、経済社会になって来ると、貧富ということが人間を扱う時の条件のようになって来ますね。だから差別が出てくる。

親鸞聖人は、こういう差別に対して「大信心の海」には、そういうものは本当は無いのだと言われるのです。

しかし現実には尊卑・上下・貧富・貴賤というものに「勤苦恩務」すると。勤苦とは、勤めることが、苦しいと。そして恩務、恩はさっきあった忙しいという。忙しく勤めると。こういうふうにして、「おのこの殺毒を懐く」。殺毒、つまり殺したくなるというわけですね。

「悪気窳冥してために妄りに事を興す」。悪気というのは悪い気ですね。悪い気は窳冥、つまりかすかで暗いと言うのだから、悪い気が何か漂っているというわけですね。そういうのに憑かれると、妄りに事を興す。人間の行動というのは、全部説明できるわけではない。「どうして」と言われても、何かよく分からないけれどもこうなったということが、よくあるのではないのでしょうか。そういうことがこの「妄りに事を興す」というふうに言われて来るわけでしょう。

次の「天地に違逆して人の心に従わず」とあります。中国では人間が生きている空間は、天地人という関係を生きているのだとします。天に羞じ地に羞ずと言われますよね。恥ずかしいということは、人間が見ているから恥ずかしいのではない、天に羞じ地に羞ずる。存在として恥ずかしいということ表現する場合に、そのような言葉があります。

文責：田村晃徳（親鸞仏教センター嘱託研究員）